



## 史料紹介 明治期における遠山での赤痢流行

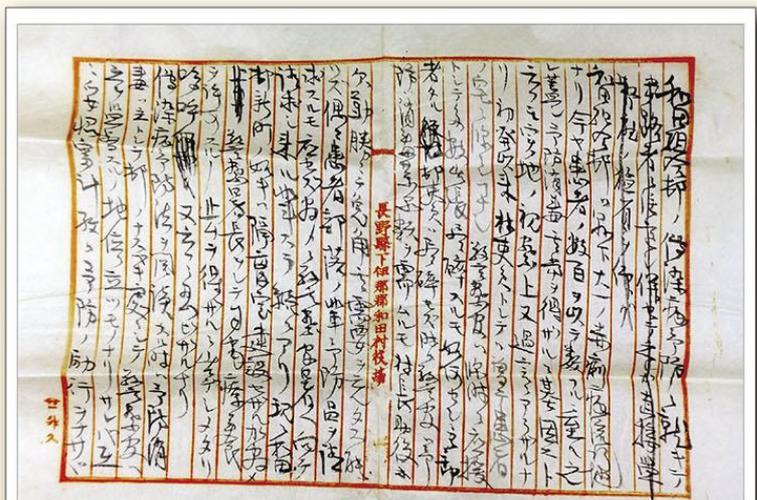
国境をまたいだ人と物資の移動が活発化した近代は、様々な感染症・伝染病が蔓延した時代でもありました。コレラ・ペスト・インフルエンザ（スペイン風邪）などの流行に、明治～大正の日本社会は大きく揺さぶられました。明治時代に流行した病の一つに、赤痢があります。主に水や食物などを通して感染し、激しい発熱や下痢を引き起こす赤痢は、明治期においてはその致死率が25%程度に及び、大変な脅威となりました。

明治20年代半ば～明治30年代初頭にかけて、赤痢は日本全国で大流行しました。長野県にもその流行は及び、明治20年代半ばころから流行が始まり、完全に収束するのは大正時代になってからでした。特に明治29年から32年までは県内での感染者が5000人を超える蔓延状態にありました。下伊那郡では特に和田村（現在の飯田市南信濃）・平岡村（現在の天龍村）で激しく流行しました。飯田市歴史研究所に寄託されている佐藤光弘家文書にのこされている史料からは、赤痢流行に揺れる和田の社会と人々の様子がうかがえます。

赤痢の流行がもたらしたものの1つは、当時の村行政に対する人々の不信です。赤痢流行を収束させるためには、消毒作業の実施や薬品の配布・患者の隔離施設の設置などが求められます。しかし当時の村長や村役場の職員は責任感をもってそれに取り組んでいないという不満を持たれている様子が、史料から読み取れます。

一方で、佐藤光弘家文書には、赤痢が流行する和田村に暮らす人々を案ずる、村外の親族や知人からの手紙・葉書も多数残されています。そのような手紙には、赤痢流行中の村での生活を案ずる思いや、水への注意のような感染対策を呼び掛ける文章が綴られています。病が流行する中で、思うように会えない人を案じ無事を願う気持ちというのは、時がたっても変わらない人間の普遍的な感情の一つなのだろうな、と思わされます。

感染症の流行は、その社会が抱えていた様々な問題を顕在化させ、社会の構造を変化させていきます。赤痢の流行が収束した後、和田村では衛生状況の改善が図られる一方で、警察の権力が強化されていくといった状況が生じていきます。遠山の地域社会が赤痢流行を経てどのように変わっていったのか、幅広い観点から検討していく必要があると考えています。



佐藤光弘家文書 U-2-1-56

明治30年代、和田で赤痢が猛威を振るっていた時期の史料と推測されます。冒頭部分は、「和田組合村ノ伝染病予防ニ就キテ…」

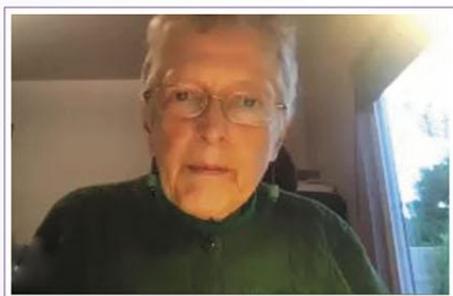
和田組合村ハ県下大一ノ赤痢病流行地ナリ、今ヤ患者ノ数百ヲ以テ数フルニ至ル、之レ蓋シ予防消毒其当ヲ得ザルニ基因スト云フモ实地ノ視察上又過言ニアラザルナリ…」と記されており、和田における激しい赤痢の流行と、その予防消毒がうまくいっていないことを指摘しています。村の危機に対して、村長たちが有効な対応をできていないことへの不満・批判が綴られた史料です。

## 「下伊那の宗教文化ネットワーク

## —松下千代と松尾多勢子を中心に—

を開催しました

2021年12月18日(土)に、松尾多勢子と松下千代という、19世紀に活躍した2人の女性に光をあて、飯田・下伊那における江戸時代後期～明治維新期の宗教・思想・文化と地域社会との関係や、その中で女性の位置などを考えるワークショップを、飯田市役所で開催しました。



アン・ウォルソール氏

アン・ウォルソール氏(カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授)の報告「松尾多勢子のネットワーク 歌会、勤王運動、周旋活動の場面」では、ネットワークやサロンという分析視角に基づきながら、和歌を学び、歌会に参加することで世間への扉を開き、その後、平田国学に出会って平田篤胤没後門人となり、幕末の京都に単身上京して勤王運動に身を投じ、さらに明治初年には新政府に対して様々な周旋活動を行うことにより、自らのネットワークを発展させ、人生を切り開いていった松尾多勢子の姿が描き出されました。

また、宮崎ふみ子氏(恵泉女学園大学名誉教授)の報告「不二道の信者ネットワークと松下千代」では、不二道の系譜や、家業出精・孝行や正直などの道徳・夫婦和合・相互扶助の実践からなる教義、19世紀における不二道の信州を含む全国的な広がりや前提に、松下千代や彼女が世話人を務めた不二道信者ネットワークの特質(身分・性別・社会的立場に制約されない)やその活動(燃料を節約できる竈の考案や水路開削といった多様な社会事業の展開)、明治維新後の儀礼改革(神道化)とネットワークの分裂などについて述べられました。

さらに、竹村雄次(歴史研究所特任研究員)のコメントでは、明治期における地域の政治的有力者(衆議院議員、飯田町長、郡書記など)の中に、不二道信者の家で平田篤胤没後門人になった者が一定数存在したことが明らかにされるとともに、維新直後の旗本近藤家の領地安堵運動に多勢子と千代が関係していたことを示す史料も紹介されました。

最後の栗谷真寿美氏(歴史研究所市民研究員)のコメント「ライフコースにみる、千代と多勢子」では、両人とも、結婚・家事・育児を一段落させた後、50歳を超えてから不二道の活動や勤王運動にのめり込んでいくことを指摘したうえで、近代になって彼女たちがどのように語られたのかという論点が提示されました。



宮崎ふみ子氏

以上の報告とコメント後に行われた質疑応答・討論では、多勢子や千代の思想的背景、不二道と平田国学の関係、男女の関係認識の展開、ネットワーク・サロンの歴史的な位置づけなどに関して活発に議論が交わされました。

会場参加とオンライン参加の併用だったこともあり、会場では50名、オンラインでは40名、計90名の参加者を得られ、盛況なワークショップとなりました。報告やコメントの内容は、来年度刊行の『飯田市歴史研究所年報』第20号に掲載される予定です。



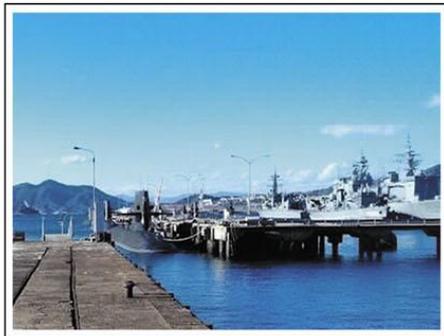
会場の様子

羽田真也(歴史研究所研究員)



## 現代のすずさんへ ～出会いへのおさそい～

上河内 陽子（歴史研究所市民研究員）



2022年元旦の呉の港。  
現役の艦船や潜水艦が見られるのは、  
旧海軍工廠の街ならではの光景です

お正月、2年半ぶりに夫の実家、広島県江田島市で過ごしました。瀬戸内海に浮かぶ江田島はみかん、レモンやオリーブの産地で、海の幸も豊富です。義母がふるまってくれるメンタイ、メンパチと呼ばれる魚のフライやマリネは、もう本当に美味しいのです。戦前、江田島は「海軍兵学校」で広くその名を馳せました。今は、セーラーカラーの海上自衛隊員が歩いているのを見かけます。

お腹も満たされ、江田島のとなりの呉（くれ）のまちを歩きました。ふと建物の壁をみると、「ここはすずさんと周作さんが待ち合わせをした場所です」とあります。そう、呉は映画「この世界の片隅に」の舞台です。戦争のさなかでも、恋に、暮らして、毎日一生懸命だった主人公、すずさんの物語。これにちなんでNHKでは、私たちの身近にいる「すずさん」（祖父母やご高齢の先輩）たちの戦争中の暮

らしのエピソードを、「#（ハッシュタグ）あちこちのすずさん」としてシェアしていることを思い出しました。

「すずさん」の一人、江田島の祖母は、長年つれそった祖父を昨年97歳で亡くしました。戦時中、軍需工場で働いたという祖父は、親戚が集まると陽気に歌い出すのが恒例でした。船の切符売りもしていた祖母はしっかり者で、買い物のお釣りの小銭は、払ったつもりで貯金箱にいれる「つもり貯金」という節約の工夫を教えてくださいました。

気持ちのよい澄んだ青空。海に船が静かに並んでいます。祖母にもすずさんにも吹いた海風が、やさしく感じられました。歴研では、講座や資料、聞き取りなどを通して多くの「すずさん」と出会えます。胸のなかを当時の風が吹き抜けるような体験です。そして私たちもまた、現代に生きるすずさんなのだと実感します。今年はどうな出会いがあるでしょう。あなたもご一緒に学んでみませんか。

### 地域史講座

◆3月5日（土）14:00～16:00 南信濃公民館  
「南信濃の木材利用を考える  
—王子製紙以降の山里—」

御料林として江戸幕府に管理された近世遠山谷の山林利用は、近代の製紙産業による開発を経て衰退し、現在は静かに次の活用の機会を待っているかのように見えます。

この講座では大正期の王子製紙撤退直前に残された記録に関する太田研究員の報告から、遠山谷の山林と山里の姿を振り返りながら、現在、地域の木造施設の設計に携わる暮らしと建築社の須永次郎氏や山林管理に携わる（株）金井山素材の金井溪一郎氏の視点を交えて、今後の山里の姿や木材利用の可能性を考えます。

講師：樋口貴彦（歴史研究所調査研究員）  
報告：太田仙一（歴史研究所研究員）  
須永次郎（暮らしと建築社）  
コメント：金井溪一郎（株）金井山素材

◆3月12日（土）14:00～16:00 川路公民館  
「明治の地図史料を読む  
—旧川路村役場文書と歴史GISの試み—」

川路の旧役場文書は、江戸時代から昭和初期の膨大な歴史資料を今日に伝えています。特に本講座では、明治初期から明治30年代までの地図史料群に的を絞り、GISという情報技術を活用した新しい歴史景観研究の方法とその成果について報告します。また、同時期の関連史料から、近代化のなかで変容する民家やまちなみについても検討します。

講師：福村任生（歴史研究所研究員）

定員：40名（オンラインでもご参加いただけます）  
申込方法：それぞれ2日前までに、電話・FAX・メールのいずれかでお申込みください。その際、受講場所とご連絡先をお知らせください。

※感染状況により、開催日の1週間前に開催可否を判断します。

# 私流 歴史の本のつくり方

—編集者として考えてきたこと—

講師

いのうえ かずお

井上 一夫 さん

(元岩波書店取締役)

3月19日(土)

第1講 13:30~15:00

原典を編むということ  
—読める史料集とは—

第2講 15:20~16:50

歴史を読み取り伝える  
—岩波新書の編集作法—

会場 飯田市役所C棟3階C311~313会議室

資料代 500円 ※高校生以下無料

申込み ※1講義のみでもご参加いただけます。

①会場での受講(定員40名) ②ご自宅等でのオンライン受講  
のどちらかでご参加いただけます。

いずれも、**3月11日(金)**までにお電話(0265-53-4670)  
でお申込みください。その際に受講方法等について  
ご案内させていただきます。

## 講師より

わたしはあるときから、学術教養出版社がめざすべきは二つに収斂されるのではないかと思うようになりました。ひとつは「残す言葉を選び抜く」であり、いまひとつは「届くかたちを編み出す」。これは濃淡の差こそあれ、すべての出版物が備えるべき二つの要素ではないかと。

たとえ人気が無くて(あるいは人気が無いからこそ)、出すべきものがあり、そのとき可能な限りわかりやすく、がんばれば読めるように工夫する努力がなされなければならない。また、いかに引く手あまたであっても(それだけ求める人が多いわけですが)、しかるべきメッセージが込められていなければならない。その緊張感が本の質を決めるのではないか。ひそかにそう思っていました。

わたしが岩波書店に入ったのは1973年。すでに刊行中だった「日本思想大系」に配属され、以後10年にわたって携わります(校正3年編集7年)。学術教養とは何かを考えるにあたって、このときの経験がいかに貴重だったか、あとで何度も思い返すことになりました。これは「残す言葉」を編む作業であり、そのとき考えた工夫は「日本近代思想大系」につながります。

そして岩波新書では、主として日本史関係書目を企画編集し、「届くかたち」の追求が大きな課題になりました。ちなみにこのとき、それまでの新書イメージとは違う性格のものもつくって(永六輔『大往生』、阿久悠『書下ろし歌謡曲』、山藤章二『似顔絵』、鈴木敏夫『仕事道楽』等々)、言葉を届かせるうえでのさまざまなヒントを得ています。

本は一冊一冊が個性的なものであり、本来、一般化できるものではありません。したがってこの講義では、大きく網をかけたうえで、私なりに感じてきたことを具体例に即してお話ししていきたいと思っています。何かしらヒントになるものがあれば幸甚。

☆飯田アカデミアは、歴史学における第一線の研究者に、最新の研究成果をわかりやすく紹介していただくものです。

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱や咳の症状のある方は会場での参加をご遠慮ください。また、感染状況により、開催日の1週間前に会場開催の実施の可否を判断します。

受講生募集!

歴研ゼミ&ワークショップ2月・3月の予定

会場:歴史研究所 研修室

### 建築史ゼミ

担当:福村任生(研究員)

2月25日/3月18日

(第3金曜日) 19:00~21:00

※2月は予定が変更になっています

### 近世史ゼミ

担当:羽田真也(研究員)

2月9日/3月9日・23日

(第2・第4水曜日) 18:30~20:30

※2月23日は祝日のため休講

### 近現代史ゼミ

担当:田中雅孝(特任研究員)

2月26日/3月12日・26日

(第2・第4土曜日) 10:00~11:40

※2月12日はアカデミア開催のため休講

### 思想史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場

2月2日・16日/3月2日・16日

(第1・第3水曜日) 19:00~21:00

### 満洲移民研究ゼミ

担当:本島和人(調査研究員)

齊藤俊江(調査研究員)

第121回 2月5日/第122回 3月5日

(第1土曜日) 10:00~11:40

### 地域史ゼミ

担当:太田仙一(研究員)

2月18日/3月11日

(第2金曜日) 18:30~20:30

※2月は予定が変更になっています

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL:0265-53-4670

各種講座、アカデミア、ゼミについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳などの症状のある方やマスクを着用されない方の受講をご遠慮ください。また、今後の感染状況により、延期または中止をする場合がありますのであらかじめご了承ください。

開所時間:午前9時~午後5時 休所日:日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日

メール配信への切り替えをご希望の方は、E-mail: [iihr@city.iida.nagano.jp](mailto:iihr@city.iida.nagano.jp) まで